ペンダントトップ

ミルキーウェイ

Milky Way

［サイズ］ 縦28mm × 横20mm

［素　材］ 水晶・アゲート・Silver925

Introduction of works

【ミルキーウェイ】

小宮山 光夫

水晶をハンドモーターの先端工具で裏彫りして、宇宙を描いた作品。

「昔からあった宇宙への憧れを、自分自身の手で表現したい」という、小宮山の夢の実現である。自分の頭の中にある星空を描いたり、星座どおりに星を配置したり。水晶というキャンバスに様々な宇宙が広がる。

彫りの深さで絵の奥行きをつける。機械でこの奥行きをつけることは今の技術では難しい。星空を描く水晶にもこだわる。描く面と反対側の面のカットや水晶の厚さによっては、光の反射が入ってしまい星空が綺麗に見えない。水晶と重ねる宝石の種類やその宝石固有の模様の活かし方、ペンダントのバチカンのデザインまで全て小宮山一人で考える。

「先端工具が滑って丸のつもりが線になっちゃったりするんだ。昔はそれを失敗作として捨てていたけれど、今はそれをどう活かそうかと考える。そうやって作った方が、味が出てお客さんにも選ばれるんだよね」茶目っ気たっぷりに小宮山は笑う。

山梨ジュエリーミュージアム

山梨県甲府市丸の内1−6−1　山梨県防災新館1階
https://www.pref.yamanashi.jp/yjm/
開館時間：10:00〜17:30（最終入館17:00）
休　館　日：火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、
その他、臨時に開館・休館することがあります。
入　館　料：無　料
駐　車　場：92台　山梨県防災新館地下有料駐車場（来館者は1時間無料）

一級宝石研磨士

小宮山 光夫

Vol.19

2019年12月発行

craftsman jewelry file.19
mitsuo komiyama
2019 December

craftsman jewelry

山梨ジュエリーミュージアム発行

宮大工の世界から、宝石の世界へ

小宮山は、地元の工業高校を卒業後、宮大工だった父親の元で大工として働き始めた。大工として、そしてその指導者としてだけではなく、京都や奈良に出かけては次々と新しい技能を習得し実践していく父親の仕事に対する姿勢は、のちの小宮山に大きな影響を与えた。

しかし、働き出して4年ほど経った頃、仕事中の事故で右手の小指の先を失ったことをきっかけに、父親に対して、尊敬はしているものの反発もあったことから、小宮山は家を飛び出すように大工を辞めてしまう。

その後、小宮山は知人の縁で宝飾品の流通の仕事を手伝ったことで、原石の販売を手がけるようになり、やがて宝石研磨の世界へと進んでいった。

宝石の更なる美しさを引き出すために常に進化し続けたい。

仕事は見て覚える

小宮山は、原石の販売先・製品の製造委託先として、毎日幾人もの宝石研磨職人の元を訪れていた。複数の宝石研磨職人との交流により、カットや研磨、連摺り（複数のルースをまとめて摺る方法）、インタリオ（裏彫り）といった幅広い加工技術を目にする機会に恵まれた。興味を持ったことを聞いているうちに、毎日3、4時間を彼らの工房で過ごすようになり、趣味の延長のような感覚で彼らの傍らで自分でもルースを作るようになっていた。

元来が器用であった小宮山は、基本を教わると、職人の作業を見ながら次々と新しい技術を覚えていった。もちろんそこには人知れぬ努力もあった。昼間に他の工房で見てきた技術をものにするため、家に帰ると、販売用に購入していた原石を惜しげもなく使って夜遅くまで練習を続けた。

多くの職人から様々な技術を教えてもらい今の自分があるという思いが強いため、小宮山は自分の技術を聞かれたら、惜しげもなくそれを教えてしまう。そして教えた相手に負けないように、その先を行く努力をする。それが、自分の師匠だった職人たちへの小宮山の恩返しの形だ。

小宮山 光夫（こみやま みつお）

一級宝石研磨士（厚生労働省認定）
宝石加工・ジュエリーマスター（山梨県認定）
やまなしの名工（山梨県知事表彰）

クラウン商会
甲府市高畑一丁目22-18　Tel:055-224-5637

一生勉強

「一生勉強」宮大工としての修業時代、父が何度も言っていた言葉だ。
棟梁としての父に言われたときは、「何が一生勉強だ。基本さえ身につければいいじゃないか」と思っていた。しかし、年を重ね、その当時の父親の年齢を超えた頃には、父の言葉の重みが理解できるようになった。
ものづくりだけでなく、消費者と直接ふれあう小売も行っているので、小宮山は、現状に満足せず前へ進み続けなければ時代に置いていかれること、自己満足で作ったものは手に取ってもらえないことを身をもって学んでいる。

どんなにカットが素敵でも、優れた技術で作っていたとしても、ジュエリーとして使い勝手の悪いものや時代にそぐわないもの、どこにでもあるものは、お客さんは欲しがらない。自分にしかない技術で、目の前にいるお客さんが喜ぶものを作り続けなければならないのだ。

そのためには、技術も作品も進化し続けなければならない。作ったものはどれも完成形ではなく、常に改良をしていく余地を残している。だからこそ、小宮山は卸しや小売に専念せず、自らも生涯職人でありつづけるのだ。

変わる美しさ。変わらない美しさ

その一方で、どんなに宝石研磨職人としての腕が上がり、自分が作った作品が売れていても、小宮山は鉱物としての宝石の販売も続けている。

若い頃は、自分でも国内外の採石地へ原石を求めて訪れた。「これはいつどこで手に入れたもの」と、自身の店に所狭しと並ぶ原石1つ1つの思い出を、小宮山はついこの間のことのように楽しそうに語る。「自分で手に入れた原石は研磨しようと思わないんだよね。加工するのは全部買ったもの」その言葉からは、売り物とはいえ、1つ1つの原石への強い愛着が感じられる。

小宮山自身が研磨加工により宝石の美しさを引き出す職人だからこそ、長い年月をかけて作られた自然のままの色や形が織りなす、原石の美しさに惹かれるのだろう。

もちろん、小宮山が加工する原石も、買った石とはいえ原石には変わりなく、それぞれ唯一無二の美しさを放っている。そのままでも十分に美しい原石を自らの手で加工するからには、原石に新しい魅力を加え、それが元々持っていたのとは違う美しさを生み出さなければならない。小宮山は宝石への愛と責任を胸に、今日も新しい挑戦を続ける。